

「教育の島」 沖永良部島出身医師の研究

——言説の構築に着目して

日高 優介¹，澤田 成章²，西村 知³

1. はじめに

沖永良部島について、「教育の島」⁴としての沖永良部島に関する言説を確認できる（高橋 2004）（和泊町誌編集委員会 1984：617）（玉起 出版年不明：207）。また、その沖永良部島の教育について、西郷隆盛、川口雪蓬、紀平右衛門ら藩政期の流人が影響を与えたといった言説も確認できる（安藤 1936=1981）（和泊町誌編集委員会 1984）（箕輪 2018）。そのような言説を前提に用いて「沖永良部島出身の教員や医師が多い」といった語りもまた確認できる（和泊町誌編集委員会 1984：617）（高橋 2004：140-141）。

とはいえ、これらの職種が実際に「多い」のかどうかについては、管見の限りににおいて確認されていない。また、上記にのべたように流人などの影響から「教育の島」になったかや、「教育の島」であるから教員や医師を多く輩出したという関係についての詳細な考察も確認できない。本稿はこれについて明らかにすることを目的とする。

これらについて検討をすすめるうえで、本稿では2つの視角を用いる。一つはシカゴ学派の代表的な研究者の一人であるハーバート・ブルーマーが提唱した、シンボリック相互作用論の3つの前提であり、もう一つは同じくブルーマーによる社会問題の定義に対する議論である。

一つは「教育の島」という定義（認識）が構築される過程についての視角だ。

ブルーマーは人々の行為と意味について、以下の3つの前提を提唱した。（1）人間は、ある事柄が自分にとって持つ意味にもとづいて行為する。（2）そうした事柄の意味は、その人間がその相手と執り行う社会的相互作用から発生する、ないしは導出される。（3）そうした事柄の意味は、その事柄に対処する際にその人間が活用する解釈過程（＝自分自身との相互作用）の過程を通じて、取り扱われたり、修正されたりする。（Blumer 1969：2=1991：2）

本稿では、ここで示される「ある事柄」を「教育の島」に置き換えるものとして考える。とくに、（3）に提示されるように「教育の島」という定義（認識）の変容に着目する。

もう一つは「教育の島」という定義（認識）が用いられる背景についての視角だ。

¹ 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近現代」教育研究センター

² 鹿児島大学法文学部

³ 鹿児島大学法文学部

⁴ 「教育の島」について、教師や保護者などによる「教育熱心な島」という捉え方や、児童や生徒、あるいは島出身者の「教育効果が高い島」という捉え方、あるいは両方を含む捉え方などがあると考えられる。本稿では「教育の島」という言説を辿るにあたり、何れについても取り扱う。

ブルーマーは、「集合行動としての社会問題」において、社会問題を特定する際に社会学者が選定した社会的特性とその状態、社会が持つ諸要因との関係からこれをおこなうことの困難を指摘した (Blumer 1971=2006: 44)。そのうえで、ブルーマーは「社会問題とはそもそも、ある社会において、いかにそれが定義され認識されるか、という点から見て存在する」とのべ、当該社会における事象の認識が社会問題について定義付けることを示唆した。

とはいえ、ブルーマーが批判した、社会的特性とその状態、社会が持つ諸要因との関係への検討と、ブルーマーが提唱した、ある社会において、いかにそれが定義され認識されるか、という定義に対する提起は相反するものではないと考えられる。

日高 (2019) は社会問題の過程についての検討から、『クレイム申し立て』の『発生』を可能にする社会的状況という要因についてあきらかにした。当該社会において「社会の状況や人間関係、経済状況といった諸々の制約を伴うコンテキストによって、個人の『クレイム』が埋没する状況」(日高 2019: 101) にあったとしても、『クレイム』は埋没しつつも力を持ち続け、『クレイム申し立て』の発生と発生以後の動因 (になる) (日高 2019: 101) とのべる。つまり、明確に語られていないことのうちに、その後の社会の変化に及ぼす影響の要素があるということだ。

ブルーマーや日高の議論は社会問題に対してのものである。しかし、当該社会 (問題) における諸要素と当該社会 (問題) の変化は無関係ではないということが両者の検討から示唆される。そのため、本稿では「教育の島」が用いられる背景となる、沖永良部島における教育の諸状況を確認する。

以上に示した立場から、本稿では鹿児島県大島郡沖永良部島について、①沖永良部島は「教育の島」であるという言説、②「教育の島」は西郷隆盛ら流人による教育の影響という言説、③沖永良部島出身の医師が多いという言説、を確認し「教育の島」として定義 (認識) される要素について検討する。

本稿の検討から、島嶼という限定された空間における、近代現代の地域社会の様態を明らかにすることができると考える。なお、本稿においては特定の個人の言説を否定するものでもない。本稿が着目するのは「誰がどのように語ったのか」という事実である。また、他の島々や集落との優劣について言及することを意図するものでもない。

2. 「教育の島」としての沖永良部

2.1 沖永良部島の概要

沖永良部島が「教育の島」⁵ であるという言説について確認を進める前に、沖永良部島についての

⁵ 鹿児島県紙の南日本新聞では1995年以降、沖永良部島を「教育の島」と描写する記事が3件ある。2件が沖永良部島出身の教育者本部廣哲によるもので (1997年1月5日朝刊) (1998年5月17日朝刊)、1件が沖永良部島出身の教育者谷元義男によるものである (1998年4月19日朝刊)。このほか、江田島や奄美、広島県の大崎上島について「教育の島」と言及している記事を確認できる。全国紙の毎日新聞では1872年以降の記事で

概要を示す。

鹿児島県南部の南西諸島に位置する沖永良部島は、鹿児島県本土のほぼ中央に位置する鹿児島市から南に540km、隣接する沖縄県の最北端辺戸岬からは北東に約60kmに位置する。周囲55.8km、面積93.69平方キロメートルの沖永良部島には人口6,246人（国勢調査 2020）の和泊町と、人口5,869人（国勢調査 2020）の知名町の2町がある。両町とも第二次世界大戦以降は1955年（昭和30年）の和泊町12,564人、知名町14,072人をピークとして人口が減少傾向にある。主要産業は農業であり、サトウキビ、テッポウユリ、ジャガイモである。特にテッポウユリは1902年（明治35年）に欧米への輸出が開始され、沖永良部空港の愛称が「えらぶゆりの島空港」であることに示されるように、沖永良部島の象徴となっている。

島内における教育機関について、小学校は和泊町に和泊⁶、大城、内城、国頭、の4校、知名町に知名、住吉、田皆、上城、下平川の5校。中学校は和泊町に和泊、城ヶ丘の2校、知名町に知名、田皆の2校である。高校は両町のほぼ中間に位置する知名町余多に沖永良部高校が1校ある。島内に高校以降の高等教育機関が存在しないため、卒業生のほとんどが島外へ進学・就職する。2019年（令和3年）3月の同校卒業生91人のうち、国立大学への進学者が10人、公立大学への進学者が3人、私立大学への進学者が18人、私立短大への進学者が2人である。専修学校への進学者は36人、各種学校への進学者は2人である。就職者20人のうち県内就職者は4人である。

社会教育施設としては、和泊町に天体観測施設、町立図書館、中央公民館、歴史民俗資料館、町研修センター、町民運動広場、柔剣道場、あかね文化ホール、ヤーシチ公園テニスコート、西郷南州記念館（歴史観光交流館）がある。知名町には町立図書館、中央公民館（含郷土資料室）、おきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなが、町民体育館がある。

この他に学習塾として、公文式の教室が各町に1つずつ。学研の教室が和泊町に1つ。早稲田育英ゼミナールが和泊町に1つ、英会話教室のECC ジュニアが知名町に1つある。

2.2「教育の島」沖永良部という言説

前項の沖永良部島の教育を巡る今日の概観を踏まえ、本項では「教育の島」沖永良部についての語りを確認する。

前項に示した沖永良部高校の進学状況、あるいは社会教育施設の数などの客観的条件から今日の沖永良部島において「教育の島」として特筆すべき状況を捉えることはできない。しかし、両町ともに町行政の基幹を教育に置いていることが確認できる。島の玄関口である沖永良部空港のすぐ横には和泊町による『教育の町』宣言の看板がある。また、和泊町から知名町に入る県道84号線上の

沖永良部島と「教育の島」を結びつける記事は確認できない。同じく全国紙の朝日新聞でも1945年以降の記事で沖永良部島と「教育の島」を結びつける記事は確認できない。

⁶ 和泊町には和泊集落がある。本稿において「和泊町」と記述するものは自治体を指し、「和泊」と記述するものは集落（字）を指す。同様に知名町には知名集落がある。本稿において「知名町」と記述するものは自治体を指し、「知名」と記述するものは集落（字）を指す。

場所にも知名町による『文化と教育の町』宣言の看板がある。

沖永良部島出身の文化人類学者高橋は沖永良部の教育に関して、以下のように言及している。

就職，就学のため本土へと渡り，その後，帰島し教師や役場職員など指導的立場になった人々は本土での経験を教育などに生かした。将来，本土で，言葉の問題で疎外感を味わうことのないようにと標準語の推奨，社会にでて引け目を感じないようにと学歴重視など教育面の強化を推進した。和泊町は1980年に『教育の町』宣言を，知名町は2000年に『文化と教育の町』宣言をしている。（高橋2004：140-141）

高橋の記述から，島における教育は「将来の本土」での生活を前提として進められていることが確認できる。そして，「教育の島」として教育の推進をしたのは，一度島外へ進学・就職し，「帰島し教師や役場職員など指導的立場になった人々」であると確認できる。

この他にも，「教育の島」に関する言説を確認することができる。沖永良部教育研究会，和泊知名両町教育委員会によって1960年代後半に刊行されたと思われる⁷、『沖永良部の教育』創刊号には，「発刊の言葉」として，発刊時沖永良部教育研究会会長であり和泊小学校長であった玉起寿芳によって「わたしたちのこの沖永良部島は昔から教育に熱心な島として注目されて参りました」と明言されている（沖永良部教育研究会編 出版年不明：1）。一方において，玉起の語りからは具体的に「いつ」からや，「誰によって」注目されているかは示されていない。文脈を捉えるならば，「島外の人」や「教育関係者」，あるいは「（日本）本土の人」，「鹿児島県の本土の人」という主語が考えられる。玉起の言説からは，「教育の島」としての沖永良部島が「いつ」から「どの範囲」で認識され用いられるのか明らかにされていない。これについて，補足する語리がある。

1969年（昭和44年）から知名小学校の校長を務めた山之内利美は前任地で沖永良部への赴任を打診された時のエピソードを残している。このなかで赴任を打診された山之内の第一声が「知名小学校ってどこにあるんですか」だった。また，沖永良部島がどこにあるかも問うている。続く文章で山之内は自身の無知を恥じていたが，教育の要職を務める立場にある人間が沖永良部を知らなかったことが確認できる（和泊町教育委員会・知名町教育委員会編1970：17）⁸。以上から，沖永良部島が「教育の島」であることについて，島内関係者にのみに流布されていたのか，あるいは島外の人にも認識されていたのかを確認することはできない。

次に比較的近年の語りについても確認する。インターネットのウェブサイト上にも「教育の島」に関する言説を確認することができる。沖永良部島出身者の郷友会組織東京沖洲会のウェブサイト

⁷ 同書の奥付に刊行年の記載はないが，和泊町立図書館のデータベースには1967年と登録されている。同書の内容の元となった教育大会が1968年（昭和43年）に開催されたことや，同書の第2号が1970年に刊行されたことから，この時期であると考えられる。

⁸ 鹿児島本土からの認識について，『郷土人系』（南日本新聞社1970）から捉えられる。中巻の教育界の項には数百の近代以降の著名な教職員が掲載されている。このうち，沖永良部島出身者の掲載は，甲斐不二男や逆瀬川助熊（鶴丸高校の初代校長）など，数えるほどである。

には「西郷南洲翁の影響？教育熱心な沖永良部」と題したコラムが掲載されている。同記事では沖永良部島の学校教育について、「沖永良部の小学校の始まりは、明治8年に和泊郷校に始まり、以後明治10年に当時の行政区画（中略）に分けて16校が加わり17校でスタートしました」と冒頭にのべられ、「全国的にも珍しく、各校が100年以上の歴史を持っています」と記す。以上の記述から、以前より（具体的には明治時代初期より）教育熱心であったことが示されていると考える。そのうえで、「明治の時代、これからは学問の世の中になるということで、離島のハンデを乗り越え2倍3倍の勉強をする風土が、生まれたようです」と結ばれている。この東京沖洲会のコラムには明らかに参照したと考えられる文献が存在する。先の玉起寿芳による「教育の島・花の島 沖永良部」と題した論考の一部だ。下記に引用する。

これから先の世は、学問の世の中だ、沖永良部の人たち全部、たがいに励ましあって学問をしなければならない。沖永良部は南海の離島僻地で、文化の光の届きにくい所だから、本土の友だちと肩を並べて行くためには、その二倍勉強しなければならないという意気込みが、全島民の心に、日増しに燃え上がって行った。（玉起 出版年不明：179）

東京沖洲会のコラムは、玉起のこの文章が参照元であることは明らかだが、実はこの玉起の文章にも先立って参考になったと思われるものがある。

（玉起 出版年不明）には、明治時代の川原祝人（教師）による私塾「吾館⁹学友会」の開塾に関する経緯として描写される。1896年（明治29年）の春、和泊尋常小学校の教師川原祝人は子どもたちを集めて語った。「本土の子供たちは大きな希望をもって、一生懸命勉強して、立派な学者や軍人や役人になって大変出世している。おまえ達はこのような南海の離島に生まれ、本土の子供たちと肩を並べて行くためには、本土の子どもたちの二倍の勉強をしなければ追いつけないと思うが、どうしたらよいのだろうか」この教師の問いかけに対して、児童の自分たちも二倍三倍勉強したいけど、家の手伝いで出来ないし、夜は灯りがないと答えるという対話が続く（玉起 出版年不明：193）。

玉起はこのエピソードの出典を1968年（昭和43年）8月10日発行の月刊紙『奄美』^{10,11}の紙上に掲載された、和泊尋常小学校で学んだ沖隆茂による、自身の学童期を振り返る投稿として紹介する。玉起が執筆した『和泊町誌』の明治時代の社会教育の項目においても沖隆茂の『奄美』への投稿が

⁹ 吾館（あかたじ）は手々知名集落の異名

¹⁰ 『奄美』の1968年8月号の現存を確認することができていない。

¹¹ 当該号の現存の確認について以下をあたった。国立国会図書館、鹿児島県立図書館、同奄美分館、鹿児島大学附属図書館、鹿児島国際大学附属図書館、志学館大学附属図書館、鹿児島県立短期大学附属図書館、和泊町立図書館、知名町立図書館、徳之島町立図書館、天城町立図書館、伊仙町中央公民館図書室、喜界町図書館、与論町立図書館、瀬戸内町立図書館、奄美市名瀬公民館図書室、奄美市住用公民館図書室、奄美市笠利公民館図書室、龍郷町りゅうがく館図書室、宇検村生涯学習センター図書室、大和村中央公民館図書室、南日本新聞社データベース部。以上に当該号は所蔵されていない。

再掲されている（和泊町誌編集委員会 1984：569）¹²。しかし、『和泊町誌』に転載された沖隆茂による文章には、川原祝人が児童を集めて対話したくだりを確認することができない。沖は「川原祝人先生が（肥後業昭の父）が、上別府家の裏の石灰売場を借りて、吾館の学童（尋常科生の希望者）約二十名を集めて、夕方から二時間程学童の予習復習をなさしめたのが始めだと思う」と記述している（和泊町誌編集委員会 1984：569）¹³。

以上の確認から、「教育の島」の定義（認識）について注目すべき点が2つある。一つは定義の変化についてだ。玉起が勉強量について「二倍」とした量を、東京沖洲会のコラムは「2倍3倍」と増やしている。このことは「教育の島」としての言説がその定義について構築される過程において、より影響力を他者（読者）に与えるように変化している可能性が考えられる。

もう一つは、定義の拡張だ。「本土の友だちと肩を並べて行くためには」という文章にみられるように、玉起によれば明治の沖永良部島民は前提として（日本）本土より劣っていたという認識がある。玉起はこれを理由に教育に力を入れたと語る。他方、本項の冒頭で示した高橋の言説からは、本土からの帰還した指導的立場の人が「教育の島」を推進したと読み取ることができるが、玉起の文章からは明治の沖永良部島民による内発的な「教育の島」の形成とも捉えることができる。そのため、定義（認識）の拡張の可能性が認められる。

以上、本項で確認したように、「教育の島」という語りは、社会的事実との一致とは別にしても、語られる時代や場面によって、その定義を変化させていることが示唆される。

他方、「教育の島」として語りには共有される背景が存在する。幕末期に沖永良部に流罪になった西郷隆盛の存在である。知名町の新城集落出身で南京都学園（現京都廣学館高等学校）創設者の本部廣哲はその創設理由について「教育の島に生まれたからです」とのべ、「教育の島」の由来を西郷隆盛に求める（南日本新聞 1998年5月17日朝刊）。

次項以降では西郷隆盛ら流人と沖永良部島の教育についての言説を確認する。

2.3 西郷隆盛と沖永良部島の教育

前項で確認した東京沖洲会のコラムのタイトルは「西郷南洲翁の影響？ 教育熱心な沖永良部」だ。本文では西郷隆盛について一切言及されていないものの、沖永良部の教育を語るうえで西郷隆盛の存在を欠くことはできない。

西郷隆盛は1862年（文久2年）、薩摩藩主島津久光から沖永良部へと遠島された。西郷の1年7ヶ月の沖永良部の滞在は島民に様々な影響を与えたとされる。

例えば、先に紹介した玉起の論考では、沖永良部の教育の背景について以下のようにのべられて

¹² 『和泊町誌』には掲載された『奄美』の刊行日を1968年（昭和43年）8月11日とある。

¹³ 川原の語りについて玉起が創作したと断ずる意図はない。玉起が誰からか直接聞いた可能性などがある。とはいえ、それについて特定することは困難である。また、先にのべたが『和泊町誌』の当該項目を執筆したのは玉起である。原著である『奄美』に掲載された沖の投稿から『和泊町誌』への転載に際して、どのような形でそれが行われたか確認する必要がある。

いる。

明治初期から大正初期までの長い間、西郷の弟子たちが入れ代わり立ち代わり、戸長や村長となって沖永良部全島を治めたが、これ等戸長や村長の統治、指導の根本にあったものは、早朝から夜おそくまで刻苦勉強していた西郷の姿であり、すべてのことに卒先垂範した西郷の姿であった。そうして、全島民を西郷先生のような立派な人間に育て上げたいという一念であった。(玉起 出版年不明：179)

西郷隆盛と沖永良部の教育の関わりについては、多くの言説を確認することができる。『嶋の南洲先生』(安藤佳翠 1936=1981)、「沖永良部島維新前後の教育史」(島伊名重 1956=1968)、『西郷南洲先生と操家』(安藤佳翠1964)、『和泊町誌 歴史編』(和泊町誌編集委員会 1984)、『沖永良部島と西郷南洲先生』(玉起寿芳編 1997)、『知名町誌』(知名町誌編纂委員会 1982)、『和泊町誌』(和泊町誌編集委員会 1984)、『偉大な教育者 西郷隆盛 沖永良部島の南洲塾』(本部廣哲 1997)、『えらぶの西郷さん』(玉起寿芳編 2010) など、沖永良部に関する文献で西郷に言及していないものを探すほうが困難である。

沖永良部出身で教員だった谷元義男は「西郷南洲先生の果たした役割は忍耐の心と読書を広めたこと。その精神を学び、学問、教育にいそしみ永良部魂を築き上げた」と語る(南日本新聞 1998年4月19日 朝刊)。

沖永良部島出身の山元大安による私費出版『沖永良部島2000——あるシマンチュウの思い』のなかでは、「西郷隆盛の影響で沖永良部島は教育の熱心な島になった」と記されている(山元 2001：36)。

西郷の沖永良部島における社会教育への影響についての言説も確認できる。1941年(昭和16年)に長野県で開催された産業組合婦人会全国大会において沖永良部の婦人団体を代表して伊集院かねがスピーチした。

島の名を沖永良部島と申します。彼のナポレオンはセントヘレナにどんなことを残されたでしょう。ただ英雄の末路のさびしい印象だけでしょう。大西郷が私達の島に残された偉業は数えるにいとまがありません。第一に敬天愛人の大思想を会得なさいました。牢屋のそばには青年を集めて学問を教えられ、島の役人を集めては社倉法によって住民をききんから救済する方法を説かれました。社倉法が産業組合の精神と同じですから、私の島は産業組合の精神の第一の先進地と自負しても恥にはなりません。(和泊町教育委員会社会教育課 1972：25)

伊集院かねのスピーチでは西郷の偉業について島民への教育と並んで、社倉法による飢饉の救済が語られている。『沖永良部島社倉の沿革』(鹿児島県社会事業協会 1937)では第二章を「島治と西郷先生」、第三章を「社倉と西郷先生」に割いている。

沖永良部における西郷隆盛の滞在は1年7ヶ月である。この滞在期間の長短について判断できないものの、諸言説からは沖永良部島の関係者にとって西郷隆盛の存在が大きいことが十分に確認できる。

本項の確認から、数十年にも渡り重ねて語り継がれる（＝再帰的に構築される）西郷隆盛と島の教育は「教育の島」という語りを強固に補強するものと考えられる。

他方、島の教育に影響を与えたとされるのは西郷隆盛のみではない。藩政期のその他の流人（遠島人）の存在も島の教育に影響を与えたという言説を確認できる。次項では流人と島の教育について検討する。

2.4 流人と沖永良部島の教育

藩政期、薩摩藩は多くの政治犯などを沖永良部島に流罪にした。『沖永良部誌』（出版者不明 出版年不明）¹⁴では、沖永良部の流人について以下のように描写している「流罪人中罪状の穢悪なりしものあるを聞かず、藩侯の嫌忌にふれ配適せられたるもの多きが如し」（出版年不明 出版年不明：48）と。本土から遠い沖永良部への流人は粗暴犯ではなく、高い知識を有する政治犯が多かったとされる。薩摩藩の流人についての総合的な研究『近世・奄美流人の研究』（2018）を記した箕輪も「政治犯になるような武士は高い教養を身につけていたから、島民に読み書きを教えて口を糊（のり）した。流人は島の文化向上に寄与したのである」とのべる（日本経済新聞 2018年6月5日 朝刊）。

自身も流人であった名越左源太は『南島雑話』において、島の流人の生活の心得について「子供に手習素読を教え」と記す。『和泊町誌 歴史編』では沖永良部島の代表的な流人の一人、川口雪蓬についての項「西原村の川口雪蓬先生」において流人の生活を以下のように示す。「當時流人の多くは代官詰所のある和泊を敬遠して田舎に留まり、能なき者は農業を営んで糊口を凌ぎ學ある者は子弟を教育してその届け物によって生活を支へるのが常であった」（和泊町誌編集委員会1985：355）。

このように、流人が島の教育に寄与したことは他の言説でも章や節を割いて特別に言及されている。昇曙夢の『大奄美史』においては、「第六篇 十、教育の遠隔と施設」として、『和泊町誌 歴史篇』においては、「第四章 中世 第十節 藩政治下諸事、十二 遠島人と文化開発」として、先の箕輪優『近世・奄美流人の研究』（2018）においては、「第六章 流人がもたらした奄美の教育文化」として言及されている。

以上に確認したように、流人の存在は沖永良部の教育を語るうえでの要素となっている。

次に、どの程度沖永良部の流人が教育に資したのか確認する。確認できうる範囲において、沖永良部への流人は1717年（享保2年）から、1867年（慶応3年）まで44人¹⁵がいる。このうち、箕輪

¹⁴ 『和泊町誌』などでは同書を衛藤助治編、1914年刊行と記述している。鹿児島県立図書館所蔵の同書を確認する限り、出版者や出版年は不明である。衛藤は大部分県出身で、1911年（明治44年）から1917年（大正6年）まで和泊尋常小学校の校長を務めた人である（和泊町誌編集委員会：622）。

¹⁵ 沖永良部の流人は高い知識を有する政治犯ばかりではない。1717年の流人1号である鯨島瑞頭は「淫乱の罪」

は沖永良部に私塾を開いた流人について以下の15名を挙げている。(カッコ内は来島年：開塾集落)

新納平太夫時以 (1750：田皆)，曾木藤太郎 (1808：内城)，萩原藤七 (1825：畦布)，紀平右衛門 (文政の頃：和)，染川四郎左衛門 (文政の頃：瀬利覚)，平瀬礼助¹⁶ (文政の頃：余多)，小田善兵衛 (文政の頃：和泊・上城)，川口雪蓬 (不明：西原)，西郷隆盛 (1862：和泊)，住政直 (文久の頃：)，児玉万兵衛 (不明：喜美留)，竹之内助市 (不明：皆川)，平富里 (不明：皆川)，村田某 (不明：黒貫)，五郎左衛門 (不明：玉城)

出典：(箕輪 2018)，(玉起 出版年不明：164-165) をもとに筆者作成

上記から，沖永良部島では1750年頃の新納から1860年頃の西郷や住まで100年以上に渡り流人による私塾が開かれていたことが確認できる。

本項では流人が沖永良部島の教育に影響を与えたという言説について確認した。次項では，藩政期の流人の教育と明治10年頃の学校教育のはじまりに重なる時期に位置する，島民による教育について確認する。

2.5 沖永良部島民による私塾での教育

先の2項では藩政期から幕末にかけて西郷隆盛等の流人が島の子弟たちに教育を施したという言説や記録を確認した。

また，明治初期の状況について玉起は「これから先の世は，学問の世の中だ」と描写し，島内における学校教育を中心とした教育熱の高まりについて記した。

この二つの状況に重なる時期に，島民による私塾による教育がなされたとの記録や言説が確認できる。

「沖永良部島維新前後の教育史」を記した島伊名重は同書において，島における教育の機会について，遠島人 (流人) による教育と沖永良部出身の文人及び医師の教育の2種類があったとのべる (永吉毅編 1968：82)¹⁷。

これに関して、『知名町誌』(1982：512) では，島民によって開かれた私塾が整理されている。

和泊

操担晋，沖島曾勲，栄寿鳳，撰玄碩，安藤佳竹，鎌田宗円

で配流された。また，乱暴で配流された百姓や，流人を護送中に銭貨を窃盗した足軽，人々を惑わしたとして徳之島のユタ (巫女) なども配流されている。

¹⁶ (箕輪 2018) では平瀬礼助と記されてあるが，(玉起 出版年不明) では平瀬市助と記してある。箕輪は先田光演による「染川家文書」の解説に依拠し表記している。

¹⁷ (玉起 出版年不明：159) では島の同書を示し，沖永良部出身の「学者」，遠島人の「学者」と翻案している。

手々知名

町右左則，沖蘇延良（沖利有），龍真玉橋，玉恵福村，矢野忠政

内城

曾木藤太郎，宗平安統，本城宗悦，豊山真粹敏，甲文郁

余多

安田蘇泉，今栄民直

出典：（知名町誌編纂委員会 1982）をもとに筆者作成

以上の整理から和泊町では和泊，手々知名，内城の三集落，知名町では余多集落に集中していることが確認できる。また，この他に玉起は竹夏鼎用（玉江春）を沖永良部島における塾の開祖として挙げ，鼎用の子鼎幹が天保年間に和泊で私塾を開いたと記す（玉起 出版年不明：159）。

開塾の時期については主として五つの時期に整理できる。

寛政年間（1789～1800）以降

竹夏鼎用（玉江春）

文政年間（1818～1829）以降

操坦晋，竹夏鼎幹，沖島曾勲，栄寿鳳

弘化年間（1844～1847）以降

町右左則，沖蘇延良（沖利有），龍真玉橋，玉恵福村，矢野忠政

安政年間（1854～1859）以降

撰玄碩，安藤佳竹，鎌田宗円，

幕末から明治初年

豊山真粹敏，甲文郁，安田蘇泉，今栄民直

出典：（和泊町誌編集委員会 1984）（知名町誌編纂委員会1982），（玉起 出版年不明）をもとに筆者作成

以上の整理からは，2つのことが確認できる。私塾の性質について，一つは島内エリートによる私塾と，流人の教えを受けた島民による私塾に分類することができる。前者については，竹夏鼎用（玉江春）や，栄寿鳳の私塾が挙げられる。沖永良部における私塾の開祖とされる竹夏鼎用（玉江春）は鹿児島に遊学し，後に沖永良部の与人になるという経歴である。また，栄寿鳳は沖縄に渡り中国人学者から医学を学び，帰島してからは医師を開業した。

後者については，今栄民直が挙げられる。今栄民直は和に在住した流人紀平右衛門から教えを受け，後に余多に開塾した。そこに学んだ人々の経歴から，島内の社会階層の高い地位による私塾は，島内エリートを再生産する性質を持っており，対して流人に教育を受けたものによる私塾は，より一般的な島民へも門戸を開いていた可能性がある。しかし，これについて確認し断言することはで

きないものの、これを示唆する言説を確認できる。時期は異なるが、明治30年代（1897年～）に島民たちによる青少年教育団体「新進舎」が和泊・手々知名につくられた。同時期学校教育は既に始まっていたが、社会教育の団体として新進舎は位置付いていた。この学舎に学んだ人々について「富家の子弟は又は家にあつて自由に勉強出来る階級の者は割に入舎しなかつた」と記されている（和泊町誌編集委員会 1984：570）。このことから、島民による私塾がどのような性質を有していたかについて断定はできないものの推測することができる。

もう一つは、教育の島の背景を西郷隆盛一人に特定することの困難さである。西郷が沖永良部島に来島したのは1862年（文久2年）である。しかし、前項でも確認したように、それ以前にかなりの数の私塾を開いた流人が来島していただけでなく、島民による私塾も多く開かれている。このことから、「教育の島」沖永良部の背景を、西郷隆盛を起点として語ることは難しい。そのため、沖永良部島は西郷以前より「教育の島」と語られうる要素を有しつつも、西郷の存在が「教育の島」を語るうえで大きく前景しているといえる。

本節では「教育の島」沖永良部について検討を進めた。「教育の島」という言説の定義の多様性、その「教育の島」が語られる際に用いられる西郷隆盛や流人による教育の状況、沖永良部島民による教育から、これについて明らかにした。

次節では、「教育の島」沖永良部の具体的な程度についてあきらかにするため、沖永良部島出身の医師について検討する。

3. 「教育の島」沖永良部島出身の医師

3.1 沖永良部島出身の医師

沖永良部島の教育について検証するうえで、その効果について確認する必要がある。

本稿の冒頭では「沖永良部島出身の教員や医師が多い」といった語りについて言及した。このうち、教員の数等については『和泊町誌 歴史編』に甲斐不二男の調査から示されている。同調査では師範学校卒業生の奄美群島の島別比較がおこなわれている。和泊町誌ではこの結果を『「教育の島」『優秀教員輩出の島』と言われ名声を博した』ことの証しとのべてある（和泊町誌編集委員会 1984：617）。このほか、沖永良部出身の教員の氏名については（玉起 出版年不明）で確認できる。（前田 2016）では元教員へのインタビューから、当時の島内の教師の取り組みを確認できる。また、インターネット上の神戸沖洲会のコラム「沖永良部集落めぐり」の余多集落の項目においても沖永良部島出身教員について言及されている。この記事のなかでは余多集落の今栄民直の私塾から多くの教育者を輩出したことが紹介されており、甲斐薫翠（元校長）、甲斐不二男（元甲南高校校長・鹿児島市教育長）、沖久教夫（元沖永良部高校・川内高校・錦江湾高校校長）ら教育者や、前東京沖洲会会長今栄貞吉（慶応大学名誉教授）の名前が列記されている。

では医師はどうだったのだろうか。高橋は沖永良部の教育についての文章のなかで、以下のよう

にのべている。

教育を重視する人は、小学校、あるいは中学校卒業後に、本土の進学校へ進ませる場合も少なくない。特に、社会的成功の一つの指標として、子供を医師にという親は多く、実際に医師となっている沖永良部出身者は多い（高橋 2004：140-141）¹⁸。

玉起もまた、「次のように多くの人たちが、最大難関といわれる大学の医学部へ進学し、刻苦勉強して医師なり、全国各地に活躍している」とのべ、69人を列記している（玉起 出版年不明：205-206）。

しかし、高橋はどの程度医師が「多い」かについて明記しておらず、玉起についても、列記した医師は氏名と出身集落のみであり、いつの医師かあきらかではない。また他の島々とその多寡について比較しているわけでもない。すなわち、どのように医師が「多い」のかは明らかではない。本節では、これについて明らかにするために、奄美社¹⁹刊行の紳士録『奄美名鑑』をもとに他の奄美群島の出身医師数との共時的な比較をおこなう。

奄美群島を比較の対象とした理由として、沖永良部出身者の認識するうえでの近接性がある。本土の鹿児島や、日本全体を参照することもあるだろうが、同じ奄美群島の島々を参照することは、多いや少ないといった認識に影響があるものとする。そのため、奄美群島の比較を対象とした。

また、そのうえで昭和26年度版、昭和28年版のデータ²⁰と昭和51年度版のデータを比較し、通時的な比較をおこなう。この期間を選定した理由として3点ある。

第1に、それ以前のデータを確認することができないことが挙げられる。『奄美名鑑』は後述するように1927年（昭和2年）から刊行されている。しかし、1927年の初版から、1936年（昭和11年）の第4版までの現存を確認することができない。そのため、確認することができう昭和26年版（第5版）をまず採用する。

第2に、近代と現代の比較が挙げられる。昭和26年版に掲載されている医師は多くが近代（明治維新から戦中）に医師になったものである。対して、昭和51年版には現代（戦後以降）に医師になったものも掲載されている。そのため、この比較をおこなううえで両版を採用し、戦後から四半世紀

¹⁸ 高橋は自身のこの言及についての脚注のなかで、徳之島は弁護士や政治家になるひとが多いとのべる。これについて、奄美群島出身の法曹関係者について研究している郷土史家の平田静也は、教員や医師といった専門職に就く人は学歴を重ねた帰結であり、対して弁護士や政治家に就く人は学歴は強く影響しないと解釈する。平田への聞き取りによれば、奄美群島出身の法曹関係者のうち弁護士の多くが、社会人経験を有したのちに、弁護士を目指したとのことである。平田の弁を借りるなら「人生の一発逆転」できるのが弁護士への道だったそうである。

¹⁹ 奄美社は和泊町出身の元教師武山宮信によって設立された。1925年に雑誌『奄美大島』（1927年に『奄美』に改題）を創刊し、同誌は1991年まで刊行された。同誌に対する評価が（中西 2008）や（白松 2009）などでなされている。また、同社は1949年に昇曙夢の『大奄美史』を初めて出版したことで知られる。

²⁰ 二つの版を用いて一つにした理由として、両版がそれぞれ県内を対象としたもの、県外を対象としたものであることがある。両版を整理することで県内外の双方を補足した。

の状況について概観することを試みる。

第3に、「教育の島」について言及する人々の認識への影響を考慮し選定した。例えば、玉起寿芳は和泊町誌において近世、明治時代、大正時代の「教育」に関する項目の執筆を担当した。また、「教育の島・花の島 沖永良部」(出版年不明)を執筆した。沖永良部教育研究会会長や和泊小学校長、和泊町中央公民館長を務めた経歴を持つ玉起が沖永良部に在住したのは、本節で対象とする期間である。また、和泊町手々知名集落出身で、東京の女学校で教員をしたのち戦後沖永良部島に帰島した谷元義男は和泊第一中学校、大島高校、沖永良部高校に勤務した。とくに沖永良部高校には1957年(昭和32年)から20年勤務した。谷元もまた本節で対象とする期間の多くを沖永良部島にあった。本節で明らかにする沖永良部出身の医師の変化と、玉起や谷元らの認識の因果関係を明らかにすることはできない。しかし、本稿で取り上げた玉起らの言説(認識)と、沖永良部出身の医師の変化は「教育の島」沖永良部島を語るうえで無関係であると断言することもできない。そのため本期間を採用した。

奄美社刊の『奄美名鑑』を用いた理由として、以下の3点がある。

まず、医師の掲載数が多いことがあげられる。医事時論社の『日本医籍録』は1934年(昭和9年)から1942年(昭和17年)まで刊行されたが、沖永良部出身の医師は4人しか掲載されていない。同様に1930年(昭和5年)に刊行された金原商店の『大日本医籍名簿 昭和6年版』は10人である。対して、『奄美名鑑』は本節に示すように多くの医師が掲載されている。そのため、統計的な分析をおこなううえで採用した。

次に、掲載の期間がある。『奄美名鑑』は1927年(昭和2年)に初版が刊行され、1986年(昭和61年)の『大奄美紳士録』と題された13版まで、長期に渡り刊行された。そのため、経年的な変化を捉えることができる。以上の理由から採用した。

最後に掲載項目がある。例えば、先に示した医事時論社の『日本医籍録』は医師名、出身市町村、勤務病院名の三項目が掲載されている。しかし、『奄美名鑑』は版毎に異なりはあるものの、顔写真、氏名、現住所、生年月日、出身市町村、出身集落、現職、学歴、家族構成などが掲載されている。詳細な分析をおこなううえで『奄美名鑑』を採用した。

なお、『奄美名鑑』を用いて分析をするうえで、注意すべきこととして以下の3点がある。まず、第一に沖永良部島(奄美群島)出身の医師全てが掲載されているわけではないということがある。同時代に医師免許を有している医師であっても、同書に掲載されていない者も確実にいる。上記に加えて、紳士録という性質上、掲載されている医師は開業医が多い。相対的に研修医や勤務医、あるいは研究者の掲載数は多くない。

次に、詳細な分析をおこなううえで欠損している情報が挙げられる。例えば、昭和26年版と28年版のデータから21人の沖永良部出身の医師を抽出したが、このうち学歴については13人しか記載されておらず、残る8人の学歴を確認することはできない。そのため、本稿ではこれらの検討から導き出されるものについて「一定の傾向」として用いる。

最後に、多くはないが沖永良部出身者の子に対する取り扱いである。『奄美名鑑』にはいわゆる

島二世と呼ばれる、島出身者が本土に移住後生んだ子も縁のある者として掲載されている。本稿ではこれらについてもデータとして採用している。

以上についての留意が求められる。

次項では昭和26年版（1951）＋昭和28年版（1953）の沖永良部島出身の医師について確認する。

3.2 昭和26年版（1951）＋昭和28年版（1953）の沖永良部島出身の医師

『奄美名鑑』の昭和26年版（第5版）と昭和28年版の『奄美人名選 全国及郷土篇』には94人の医師が掲載されている。表1は、島別の奄美群島出身の医師数と、この時期に最も近い国勢調査である1950年（昭和25年）の各島の人口に対する比率、10万人あたりに換算した際の医師数を示したものである。

表1 奄美群島出身の医師数（島別）S26＋S28

島	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数
奄美大島	107,904	48	0.044%	44.5
喜界島	18,352	12	0.065%	65.4
徳之島	53,333	11	0.021%	20.6
沖永良部	28,309	21	0.074%	74.2
与論	8,141	2	0.025%	24.6
合計	216,039	94	0.043%	43.5
日本	89,275,529			105.9

出典：（奄美社 1951）、（奄美社 1953）、（総務省統計局2014）、（厚生省大臣官房統計情報部 2011）より筆者作成

この表から、医師数の実数としては奄美大島の48人が最も多いものの、次いで沖永良部島が21人（和泊町15人、知名町6人）であることが示される。各島の人口と比較した際、沖永良部島が0.074%と最も多いことが確認できる。これを10万人に換算した際、10万人あたり74.2人の医師がいることがわかる。

また、国勢調査、厚生省大臣官房統計情報部のデータを参考²¹に確認すると、日本全体の人口10万人あたりの医師数は105.9人である。対して、奄美群島全体の人口10万人あたりの医師数は43.5人である。沖永良部島の人口10万人あたりの医師数は74.2人であることから、奄美群島全体としても、沖永良部島としても全国平均を上回っていないことがわかる。

次に、行政区別の医師数について確認する。表2は行政区別の奄美群島出身の医師数と、この時期に最も近い国勢調査である1955年（昭和30年）の各島の人口に対する比率、10万人あたりに換算した際の医師数を示したものである。

²¹ 異なる統計と異なる分析を用いているため、参考値として取り扱うことに留意する。

表2 奄美群島出身の医師数（行政区別）S26+ S28

行政区	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数	行政区	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数
名瀬市	28,973	16	0.055%	55.2	喜界町	10,999	5	0.045%	45.5
三方村	9,759	0	0.000%	0.0	早町村	7,353	7	0.095%	95.2
大和村	6,373	1	0.016%	15.7	亀津町	12,438	7	0.056%	56.3
宇検村	7,615	1	0.013%	13.1	東天城村	10,139	1	0.010%	9.9
西方村	4,227	0	0.000%	0.0	天城村	13,043	0	0.000%	0.0
実久村	5,322	4	0.075%	75.2	伊仙村	17,713	3	0.017%	16.9
鎮西村	7,355	2	0.027%	27.2	和泊町	13,260	15	0.113%	113.1
古仁屋町	11,987	5	0.042%	41.7	知名町	15,049	6	0.040%	39.9
住用村	4,490	2	0.045%	44.5	与論村	8,141	2	0.025%	24.6
龍郷村	9,703	10	0.103%	103.1	合計	216,039	94	0.043%	43.5
笠利村	12,100	7	0.058%	57.9	日本	89,275,529			105.9

出典：（奄美社 1951）、（奄美社 1953）、（総務省統計局2014）、（厚生省大臣官房統計情報部 2011）より筆者作成

出身医師が最も多い行政区は名瀬市（奄美大島）の16人である。次いで和泊町（沖永良部島）の15人、第三位は龍郷村（奄美大島）の10人である。沖永良部島の知名町は20行政区中7位の6人である。

人口比に対する医師数は、和泊町（沖永良部島）が0.113%と最も多く、ついで龍郷村（奄美大島）の0.103%、早町村（喜界島）の0.095%と続く。実数で最も多い名瀬市の人口比は0.055%である。また、沖永良部島の知名町は全島の平均0.043%をやや下回る0.040%である。

また、国勢調査、厚生省大臣官房統計情報部のデータを参考²²に確認すると、日本全体の人口10万人あたりの医師数は105.9人である。対して、奄美群島全体の人口10万人あたりの医師数は43.5人である。このうち、沖永良部島和泊町の人口10万人あたりの医師数は113.1人である。同じく沖永良部島知名町の人口10万人あたりの医師数は39.9人である。これらのことから、奄美群島全体としての人口10万人あたりの医師数は全国平均を上回っていないものの、和泊町のみ全国平均を上回っていたことがわかる。知名町については全国平均を大きく下回るものの、奄美群島全体平均についてはやや下回る値を示したことがわかる。

以上の確認から、人口に対する医師の数として「沖永良部島出身の医師が多い」ことがわかる。また、とくに和泊町出身の医師が多いことがわかる。

では、そのような沖永良部出身の医師たちはどのような性質を有していたのか、出身集落、在住地、学歴、学位の数から確認する。

まず、出身集落について確認する。和泊町出身の医師の出身集落は和泊（9）、手々知名（3）、玉城（2）、皆川（1）の4集落である。和泊が最も多い9人であり、手々知名の3人が続く。知名町出身の医師の出身集落は余多（2）、竿津（1）、久志検（1）、瀬利覚（1）、不明（1）の4集落が確認できる。余多が2人とやや多く、他の3集落は各1人である。

²² 異なる統計と異なる分析を用いているため、参考値として取り扱うことに留意する。

和泊集落や手々知名集落は沖永良部島内においてシュータジマ（シュータ²³：与人や社会的エリート＋シマ：集落）と呼称されており、また流人や島民によって多くの私塾が作られた集落でもある。鹿児島県出身者の紳士録『郷土人系』においても「奄美の中でもとりわけ和泊出身の学者がたくさん出たのは、かつてここに薩藩代官所が置かれ、本土との文化的交流が比較的さかんであったためと考えられる」（南日本新聞社 1970：下282）とある。また、知名町の余多集落は知名町で唯一私塾が開かれた場所であり、本節の冒頭でも多くの教育者を輩出したことを示した。これらの言説と出身医師の数について因果関係を明らかにすることはできないものの、「教育の島」や「出身医師」について言及するうえで人々の語りの念頭におかれることが想定される。

次に在住地について確認する。沖永良部島出身の医師が開業、就業した場所は、鹿児島県（9）、東京都（4）、愛知県（2）、岐阜県（2）、兵庫県（2）、福岡県（2）である。

鹿児島県9人のうち1人は沖永良部の和泊町で開業している。

次に学歴について確認する。学歴について確認することができる13人の出身校は、愛知県立医専（2）、熊本医専（3）、台北医専（2）、満州国立佳木斯医科大（1）鹿児島医専（1）、九州医専（1）、九州大学（2）、京都大学（1）である。特定の出身校に関する有意な傾向を捉えることはできないものの、医専出身が多いことを確認できる。それ以前の学歴との検討から、第一鹿児島中学校から熊本医専に2人が進学している。この他、第二鹿児島中学校から第七高等学校を経て九州帝国大学で医師免許を取得したものが2人いる。

最後に医学博士の学位について確認する。「医学博士」、或いは「医博」と特記されている医師は4人である。

本項では、『奄美名鑑』の昭和26年版（第5版）と昭和28年版の『奄美人名選 全国及郷土篇』に掲載されている沖永良部出身の医師について、他の島々出身の医師との共時的な比較やその属性について確認した。次項では、1976年刊行の『奄美名鑑』昭和51年版（第12版）について確認する。

3.3 昭和51年版（1976）の沖永良部島出身の医師

『奄美名鑑』の昭和51年版（第12版）には85人の医師が掲載されている。表3は、島別の奄美群島出身の医師数と、この時期に最も近い国勢調査である1975年（昭和50年）の各島の人口に対する比率、10万人あたりに換算した際の医師数を示したものである。

²³ シュータについて高橋は、薩摩藩から派遣された役人と島妻のあいだに生まれた子の子孫であり、島内において社会的地位の高い階層を形成したと説明する。転じて現在では役場に勤める公務員をシュータと呼称することもあると記す（高橋 2004：80）。また、九学会連合の調査による（松原 1981）では和泊町の西原集落を題材に集落内における社会階層の検討がおこなわれている。沖永良部出身の医師についてさらなる分析をすすめるうえで、どの集落の出身であるか、あるいは集落内においてどのような階層の出自を持つかについて検討の余地がある。本稿では紙幅の都合と、本項の目的からこれについて取り扱わない。

表3 奄美群島出身の医師数（島別）S51（単位：人）

島	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数
奄美大島	85,171	38	0.045%	44.6
喜界島	11,464	6	0.052%	52.3
徳之島	35,391	13	0.037%	36.7
沖永良部	16,882	26	0.154%	154.0
与論	6,971	2	0.029%	28.7
合計	155,879	85	0.055%	54.5
日本	111,939,643			118.4

出典：（奄美社 1976）、（総務省統計局2020）、（厚生省大臣官房統計情報部 2011）より筆者作成

この表から、医師数の実数としては奄美大島の38人が最も多いものの、次いで沖永良部島が26人（和泊町18人，知名町8人）であることが示される。各島の人口と比較した際、沖永良部島が0.154%と最も多いことが確認できる。これを10万人に換算した際、10万人あたり154人の医師がいることがわかる。

また、国勢調査、厚生省大臣官房統計情報部のデータを参考²⁴に確認すると、日本全体の人口10万人あたりの医師数は118.4人である。対して、奄美群島全体の人口10万人あたりの医師数は54.5人である。沖永良部島の人口10万人あたりの医師数は154.0人であることから、奄美群島全体としては全国平均を上回っていないものの、沖永良部島のみ全国平均を大きく上回っていることがわかる。

次に、行政区別の医師数について確認する。表4は行政区別の奄美群島出身の医師数と、この時期に最も近い国勢調査である1975年（昭和50年）の各島の人口に対する比率、10万人あたりに換算した際の医師数を示したものである。

表4 奄美群島出身の医師数（行政区別）S51（単位：人）

行政区	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数	行政区	人口	出身医師数	出身医師/人口	人口10万人あたり数
名瀬市	46335	10	0.022%	21.6	喜界町	11464	6	0.052%	52.3
大和村	2733	1	0.037%	36.6	徳之島町	15215	7	0.046%	46.0
宇検村	2671	0	0.000%	0.0	天城町	9153	1	0.011%	10.9
瀬戸内町	15290	12	0.078%	78.5	伊仙町	11023	5	0.045%	45.4
住用村	2591	1	0.039%	38.6	和泊町	8615	18	0.209%	208.9
龍郷町	6220	5	0.080%	80.4	知名町	8267	8	0.097%	96.8
笠利町	9331	9	0.096%	96.5	与論町	6971	2	0.029%	28.7
					合計	155879	85	0.055%	54.5
					日本	111,939,643			118.4

出典：（奄美社 1976）、（総務省統計局2020）、（厚生省大臣官房統計情報部 2011）より筆者作成

²⁴ 前項と同様に異なる統計と異なる分析を用いているため、参考値として取り扱うことに留意する。

出身医師が最も多い行政区は和泊町（沖永良部島）の18人である。次いで瀬戸内町（奄美大島）の12人、第三位は名瀬市（奄美大島）の10人である。沖永良部島の知名町は14行政区中5位の8人である。

人口比に対する医師数は、和泊町（沖永良部島）が0.209%と最も多く、次に多いのが知名町（沖永良部島）の0.097%である。第三位は笠利町（奄美大島）の0.096%である。実数第二位の瀬戸内町（奄美大島）の人口比は0.078%である。

また、国勢調査、厚生省大臣官房統計情報部のデータを参考²⁵に確認すると、日本全体の人口10万人あたりの医師数は105.9人である。対して、奄美群島全体の人口10万人あたりの医師数は54.5人である。このうち、沖永良部島と和泊町の人口10万人あたりの医師数は208.9人である。同じく沖永良部島知名町の人口10万人あたりの医師数は96.8人である。これらのことから、奄美群島全体としての人口10万人あたりの医師数は全国平均を上回っていないものの、和泊町のみ全国平均を大きく上回っていたことがわかる。また、和泊町、知名町両町の人口10万人あたりの医師数が奄美群島全体の平均を大きく上回っていたことがわかる。

以上の確認から、人口に対する医師の数として「沖永良部島出身の医師が多い」ことがわかる。また、とくに和泊町出身の医師が多く、知名町もそれに次いで多いことがわかる。

では、そのような沖永良部出身の医師たちはどのような性質を有していたのか、出身集落、在住地、学歴、学位の数から確認する。

まず、出身集落について確認する。和泊町出身の医師の出身集落は和泊（10）、手々知名（5）、国頭（1）、後蘭（1）、皆川（1）の5集落である。和泊が最も多い10人であり、手々知名の5人が続く。知名町出身の医師の出身集落は知名（1）、上平川（1）、下平川（1）、住吉（1）、久志検（1）、瀬利覚（2）、竿津（1）の7集落が確認できる。瀬利覚が2人とやや多く、他の6集落は各1人である。

前項でも確認したように、和泊町に関してはシュータジマとされる和泊集落や手々知名集落に集中していることがわかる。また、知名町の瀬利覚がやや多いものの、7集落と医師の出身集落が分散していることがわかる。

次に在住地について確認する。沖永良部島出身の医師が開業、就業した場所は、鹿児島県（13）、東京都（3）、神奈川（1）、千葉（2）、埼玉（1）、兵庫（4）、福岡（1）、宮崎（1）である。

鹿児島県13人のうち4人は沖永良部で開業している。

次に学歴について確認する。学歴について確認することができる23人の出身校は、台北医専（5）、慈恵医大（3）、熊本医専（1）、熊本医大（1）、満州国立佳木斯医科大（1）、昭和大学（1）、日大（1）、日本医専（1）、東京医専（1）、鹿児島医専（2）、九大（3）、鹿児島大（2）、京大（1）、鹿児島医大（1）である。特定の出身校に関する有意な傾向を捉えることはできないものの、医専出身が10人に対して大学出身者が13人である。それ以前の学歴との検討から、第二鹿児

²⁵ 異なる統計と異なる分析を用いているため、参考値として取り扱うことに留意する。

島中学校から第七高等学校を経たものが九州帝国大学と鹿児島大学、熊本医大に進学していることを確認できる。また、奄美群島に設置されていた大島中学校から台北医専と熊本医専に進学していることが確認できる。

最後に医学博士の学位について確認する。「医学博士」、或いは「医博」と特記されている医師は15人である。

本項では、『奄美名鑑』の昭和51年版に掲載されている沖永良部出身の医師について、他の島々出身の医師との共時的な比較やその属性について確認した。次項では前項と本項で整理したデータについて通時的な比較を行う。この比較から近代から現代への変化を確認する。

3.4 沖永良部島出身の医師の近代から現代への変化

本節の第2項では近代後期に医師になった沖永良部出身者について確認した。第3項では現代の初期に医師になった沖永良部出身者について確認した。本項ではこの2つの時代の変化について通時的な比較をおこなう。

まずは医師の数の変化について確認する。昭和26年版（1951）+昭和28年版（1953）の沖永良部島出身の医師は21人（和泊町15人、知名町6人）であった。対して、昭和51年版（1976）の沖永良部島出身の医師は26人（和泊町18人、知名町8人）である。昭和25年（1950年）の沖永良部島の人口が28,309人（和泊町13,260人、知名町15,049人）であったのに対し、昭和50年（1975年）の沖永良部島の人口が16,882人（和泊町8,615人、知名町8,267人）であった。人口が大きく減少するなかで医師の数は増加していることが確認できる。

次に出身集落について確認する。昭和26年版（1951）+昭和28年版（1953）の沖永良部島出身医師の出身集落は9集落（和泊町4集落、知名町5集落）であった。対して、昭和51年版（1976）の沖永良部島出身医師の出身集落は12集落（和泊町5集落、知名町7集落）であった。多様な集落から医師を輩出してことが確認できる。

医師の在住地の変化についての確認からは、多様化を捉えることができる。昭和26年版（1951）+昭和28年版（1953）の沖永良部島出身医師の在住地6都県であった。対して、昭和51年版（1976）の沖永良部島出身医師の在住地は8都県である。多様な地域に在住しているのみならず、鹿児島県在住の医師が9人から13人に増加している。また、このうち沖永良部島で開業している医師も1人から4人に増加している。

学歴の変化についての確認からは、多様性の増加と高学歴化を捉えることができる。昭和26年版（1951）+昭和28年版（1953）の沖永良部島出身医師の学歴は5校の医専と3校の大学であった。対して、昭和51年版（1976）の沖永良部島出身医師の学歴は5校の医専と9校の医大である。医師免許を取得した機関が増加したのみならず、大学で医師免許を取得したものが増加している。

最後に医学博士の学位の変化について確認する。昭和26年版（1951）+昭和28年版（1953）の沖永良部島出身医師の医学博士の学位取得者は4人であった。対して、昭和51年版（1976）の沖永良部島出身医師の医学博士の学位取得者は15人であった。学位として最も高い位置にある医学博士の

取得者は大きく増えたことが確認できる²⁶。

以上の通時的変化から、沖永良部島出身医師はその数を増やしたのみならず、在住地や出身校の多様化から「さまざまな場所で活躍している」や、医専から医大への学歴の変化、医学博士の学位の取得者の増加から「優秀な人が活躍している」といった認識に影響を及ぼす要因が確認できる。

以上の変化について、本項の冒頭でのべたように、「教育の島」に言及する玉起ら同時代人の認識に影響を及ぼしたか、直接的な言説を確認することはできない。

とはいえ、「教育の島」として定義（認識）される要素の背景として特定できるのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では「教育の島」として語られる沖永良部島について、①沖永良部島は「教育の島」であるという言説（2節2項）、②「教育の島」は西郷隆盛ら流人による教育の影響という言説（2節2項、2節3項）、③沖永良部島出身の医師が多いという言説（3節）、などを確認し「教育の島」として定義（認識）される諸要素について検討をおこなった。

以上について、「教育の島」という言説が沖永良部出身者（とくに教育関係者）を中心として用いられた（構築された）こと、「教育の島」という言説が構築される背景や、用いられる際に再構築されていることを確認した。とはいえ、教育と医師輩出の因果関係について十分な説明が及ばなかった。また、なぜ多くの医師を輩出したかについても明らかにすることができなかった²⁷。

これについて明らかにするうえで、個々の医師たちについての質的な検討が求められる。沖永良部出身の名家であり、多くの医師を輩出した操家に関する記録は確認することができる（前田 2004；操 1986；安藤・有川 1982；南日本新聞社 1970：下282）。操家のみならず、より多くの医師についての検討が求められる。

加えて、これらの沖永良部出身の医師と沖永良部の関係についても検討する余地がある。沖永良部出身の医師の多くは島外で生涯を終えている。彼らが帰島しなかった理由としては様々な要因が想定される。とはいえ、島外の出身医師たちがどのように沖永良部島に関わったかについて検討することは、沖永良部島の教育について知見を加えるものとする²⁸。

最後に、「教育の島」沖永良部について検討するうえで、教師や医師など社会的地位が高い人々

²⁶（橋本 1998）では1920年（大正9年）の第三次学位令以降、学位発行の基準の緩和や、学位発行機関の増加から開業医の箔付けに博士号の取得者が増加したと説明されている。

²⁷ その因果関係を解明することは本稿の目的ではない。とはいえ、他の奄美群島の島々との出身医師についての明確な差がある以上、これについて探究する余地がある。社会的地位を上昇（垂直的な社会移動）させるロールモデルや、島における疾病や風土病（フィラリア等）の状況などからこれについて検討することができる。と考える。

²⁸ 操家の子孫は岐阜県で医師として多くが働いているが、和泊町のふるさと納税者のリストに操家の子孫の名を確認することができる（和泊町役場企画課 2022）。また、千葉県の医師会会長をつとめた田畑陽一郎は知名町に皇后陛下来島を記念する歌碑と庭園を寄贈している。

以外の人々への教育についても検討する必要がある。これについては、島内の人々だけでなく、島外へ移住した人々への検討が求められる。沖永良部島は戦前より多くの人々が島外へと移住した歴史がある^{29, 30, 31}。とくに京阪神地区において製鉄所等の工場へ就職した人が多い³²。そのような人々にとって、沖永良部島の教育や「教育の島」という言説がどのような意味を持つか検討することで、「教育の島」沖永良部の総体にせまることができると思う。

以上について別稿にて取り扱う。

謝辞

研究をおこなうにあたり、資料の提供やご助言を頂いた和泊町の歩み編さん室の先田光演氏、知名町中央公民館の前利潔氏、郷土史家の平田静也氏に感謝する。また、調査にあたり協力頂いた和泊町役場、徳之島町立図書館に感謝する。そして、研究の契機を頂いた鹿児島大学名誉教授 萩野誠先生に深謝する。

本研究（の一部は）、鹿児島大学「鹿児島の近現代」教育研究センターの助成を受けたものである。

引用文献

出版者不明、出版年不明、『沖永良部誌』私家版。

安藤佳翠1936=1981『嶋の南洲先生』和泊町西郷南洲顕彰会。

安藤佳翠、有川貞辰編1982『操家履歴』私家版。

Blumer, Herbert G., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hal, p.78-89. (後藤将之訳1991『シンボリック相互作用論パースペクティヴと方法』勤草書房)。

———, 1971 “Social Problems as Collective Behavior,” *Social Problems*, 18(3): 298-306. (桑原司・山口健一訳2006「集合行動としての社会問題」『経済学論集』66: 41-55)。

知名町誌編纂委員会1982『知名町誌』和泊町。

橋本紘市1998「わが国における医学博士の社会的分析」『学位研究』7: 61-77。

日高優介2019「鹿児島県喜入町における石油備蓄基地の導入に関する社会学的研究：「地域社会の開発」への社会的構築主義からのアプローチの可能性」『地域政策科学研究』16: 87-105。

鹿児島県社会事業協会1937『沖永良部島社倉の沿革』財団法人鹿児島県社会事業協会。

厚生省大臣官房統計情報部2011「平成8年医師歯科医師薬剤師調査より第3表 人口10万対医師数の年次推移、業務の種別」, (2023年1月25日取得, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/>)。

²⁹ 沖永良部島出身者の郷友会組織である東京沖洲会は1913年（大正2年）に、神戸沖洲会は1926年（昭和元年）に設立された。

³⁰ (中脇 2019=2020) は、戦中戦後の沖永良部が舞台の小説である。このなかで島外への移住者が登場人物としている。移住と帰島は沖永良部を描く重要な要素であると考ええる。

³¹ (前利2006) は近代から現代にかけての沖永良部島民の移住史を扱っている。災害や疾病の流行、あるいは島内における身分制度を要因として、本土へと移住した島民について詳述されている。

³² (西村・国場 1999) では『都市下層』『工場労働者』居住地域に流入し、阪神淡路大震災では神戸市民を上回る被害を受けたことがのべられる。

- 前田晶子2004「離島における地域の人間形成と学校－沖永良部島・国頭小学校の1970年代－」『奄美ニューズレター』8：9-17.
- 前利潔2006「沖永良部島民の移住物語」鹿児島県立短期大学地域研究所『沖永良部島の社会と文化』鹿児島県立短期大学地域研究所99-125.
- 南日本新聞社1970『郷土人系』，春苑堂書店.
- 箕輪優2018『近世・奄美流人の研究』南方新社.
- 操坦道1986『牛歩九十年』西日本新聞社.
- 中西雄二2008「奄美出身者と同郷者メディア——エスニック・メディア研究との関連で」『人文論究』57（4）：65-85.
- 中脇初枝（2019=2020）『神の島のこどもたち』講談社.
- 西村雄朗・国場壱1999「震災と郷友会：『沖州会』の場合」岩崎信彦・鶴飼孝造・浦野正樹・辻勝次・似田貝香門・野田隆・山本剛郎編『阪神・淡路大震災の社会学2』昭和堂212-223.
- 昇曙夢1948『大奄美史』奄美社.
- 沖永良部教育研究会・和泊知名両町教育委員会編，出版年不明，『沖永良部の教育』創刊号.
- 白松大史2009「雑誌『奄美』の1920年代——奄美研究への可能性と『社会評論』に注目して」『教育と社会研究』19：72-77.
- 島伊名重1923=1968「沖永良部島維新前後の教育史」永吉毅編『沖永良部島郷土資料集』和泊町.
- 総務省統計局2014「昭和30年国勢調査人口総数」，（2023年1月25日取得，<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/>）.
- 2020「昭和50年国勢調査人口総数」，（2023年1月25日取得，<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/>）.
- 玉起寿芳，出版年不明，「教育の島・花の島 沖永良部」私家版.
- 玉起寿芳編2010『えらぶの西郷さん』和泊西郷南洲顕彰会.
- 高橋孝代2004『沖永良部冬眠のアイデンティティと境界性』学位申請論文，早稲田大学.
- 武山宮信編1951『奄美名鑑 昭和26年版』奄美社.
- 1953『奄美人名選 全国及郷土篇』奄美社.
- 1976『奄美名鑑 昭和51年版』奄美社.
- 和泊町教育委員会・知名町教育委員会1970『沖永良部の教育』2：和泊町・知名町.
- 和泊町誌編集委員会1984『和泊町誌 歴史編』和泊町.
- 和泊町教育委員会社会教育課1972『和泊町 社会教育の現状 昭和47年度』和泊町.
- 和泊町役場企画課2022『広報誌わどまり』2022年3月号，和泊町.
- 山元大安2001『沖永良部島2000——あるシマンチュウの思い』私家版.

引用 web サイト

- 神戸沖洲会2008「『沖永良部集落めぐり』NO26」，神戸沖洲会，（2023年1月25日取得，WayBack machine にて取得，https://web.archive.org/web/*/http://heartland.geocities.jp/koubetyuusyuukai/hitorigoto4.html）.
- 東京沖洲会，最終更新日不明，「西郷南洲翁の影響？教育熱心な沖永良部」，東京沖洲会，（2023年1月25日取得，<https://tokyo-chushukai.jimdofree.com/> ちょっとイイ話 / 沖永良部は教育熱心 / ）。.